

平成 30 年 6 月 28 日現在

機関番号：32637

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K02760

研究課題名(和文) 多面的アプローチによる受動文の生成と習得に関する研究

研究課題名(英文) A Study from Multiple Approaches of the Generation and Acquisition of Passives

研究代表者

松谷 明美 (MATSUYA, Akemi)

高千穂大学・人間科学部・教授

研究者番号：60459261

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、生成文法・認知言語学・英語教育の視点から、英語受動文の生成・解釈、第二言語習得に関して、(1) 共通知識を最新化したり、受動者・対象を前景化するコンテキストにおいて英語受動文が生成されること、(2) その解釈は統語・意味・運用のインターフェイスにおいて得られ、コンテキスト依存的事であること、(3) これらの要素が英語受動文の習得を促すことを、母語話者と非母語話者への調査実験を通して明らかにした。

研究成果の概要(英文)：From the viewpoints of generative grammar, cognitive linguistics, and teaching English as a foreign language, this study has proven the following as to the production, interpretation, and acquisition of English passives via experiments on native and non-native speakers. First, English passives are triggered in a context which updates the common ground and foregrounds the patient and the theme. Second, the interpretations are context-dependent and obtained at the interface among syntax, semantics, and pragmatics. Finally, the teaching materials of these factors motivate the acquisition of English passives.

研究分野：言語学 英語教育

キーワード：統語論 運用論 意味論 英語教育 受動文

1. 研究開始当初の背景

生成文法の GB 理論(Chomsky (1986) 等)においては、受動態形態素が、能動文において目的語が受け取る対格と主語が受け取る外項意味役割を動詞から吸収するため、内項意味役割をすでに与えられている目的語である名詞は、主語の位置(IP 指定部)に移動し主格を付与され、主語は前置詞 by の目的語の位置に移動することで、外項意味役割を付与されて受動文が生成されると説明されている。極小プログラムにおいても、移動による形式特性としての主格の照合と、外項意味役割の付与が受動文を認可することにおいて必須とされている(Chomsky (1995))。

(1) a. John saw Bill.

b. [_{IP} Bill was [_{VP} seen t_i by John]
Chomsky (1986:73)

運用論の視点から、徳永(1998)は(2)についてコンテキストを与えることで、「中立」(単にその事実を伝える)、「迷惑・被害」(田中さんが山田さんに会いたくないと言っていた場合)、「受益」(田中さんが山田さんを以前から尊敬していた場合)の3通りの解釈の可能性を指摘している。

(2) 田中さんは山田さんに石川さんを紹介された。

徳永(1998:460)

上記が示すように、生成文法において、余計な操作である移動を含む受動文を生成することに関する動機づけが明らかにされていない。日本語の受動文が主語に対しての迷惑・被害・受益と事実を述べるだけの中立的な解釈を考慮された生成プロセスが提案されている一方で、英語受動文の生成プロセスは中立的な解釈を前提としている。

2. 研究の目的

本研究では、受動文の生成と解釈において違いが見られる日本語を母語とする(第二言語としての)英語学習者(大学生)が英語受動文を習得するプロセス明らかにすることを目指す。生成と解釈に関して、英語と日本語の認知・意味・運用に関する違いをふまえた適切なコンテキストが、英語の受動文の習得を推し進めるといふ仮説を、日本と米国で母語話者および非母語話者に対して調査・実験を行い、検証する。受動文に見られる「中立」・「(主語の)被害・迷惑」・「(主語の)受益」以外に、(3)の例文において、発話の際のコンテキスト次第で、話者の疑問・心配等の否定的な心理的含意(「ジョンはそんなことをする人じゃないのに」)、肯定的な心理的含意(「メアリーは(気に入っている)ジョンにメールアドレスを尋ねられて、良かった」)、中立的な心理的含意(伝聞・報告等)にも焦点を当てて、調査分析を行い、英語受動文の生成と解釈プロセスを探り、その結果に基づいた第二言語としての英語受動文の習得プロセスを提案することを目指す。

(3) Mary was asked her e-mail address by John.

3. 研究の方法

計算上経済的ではない受動文の動機づけが認知・意味・運用特性にあると想定し、大人の母語話者を対象に、どのようなコンテキストにおいて受動文が生成されるか(能動文ではなく受動文が選択されるか)、また受動文が選択されるコンテキストの中のどのような特性が、話者の肯定的な情緒を含む解釈、否定的な情緒を含む解釈、そして事実を伝える中立的な解釈の3種類を生み出すのか、そして、話者がそれぞれの解釈の場合にその目標文である受動文を発話する場合、どのような音韻論的特性が含まれているかについて Praat を用いることで分析した。能動文ではなく受動文を選択・生成する適切なコンテ

トが、英語の受動文の習得を推し進めるとい
う想定のもと、認知・意味・運用の視点から、
実際に英語論文で使用されている受動文と
その前後のコンテキストを抽出し、分析した。
特に接続副詞に焦点を当て、能動文・受動文
それぞれを誘発する事態に対する捉え方の
違いをコンテキストに組み込みデザインし
た実験を、非母語話者である英語学習者（大
学生）に調査・実験し、その結果を統計的に
分析した。

4. 研究成果

平成 27 年度は、生成の段階で意味・運用
の特性に関わる理論的枠組みを作るために、
受動文に関する先行研究を分析し、受動文が
生成される動機づけとして、運用・意味上の
要因が関与することを探った。受動文にする
ことで、能動文と異なり、話者の情緒的・感
情的な意味解釈が生じることを Patricia
Hironymous (Glendale College・海外共同研究
者) (以降、ヒロニマスと記す) Shant Shahoian
(Glendale College・海外共同研究者) (以降、
シャホイアンと記す)・高橋千佳子 (東京純
心大学・連携研究者) (以降、高橋と記す)
の協力のもと、英語の母語話者と日本語の母
語話者への調査を実施し、それらの実験の結
果を比較分析し、極小プログラムの枠組みで、
Factivity と Widening (Zanutinni & Portner
(2003)) と Common Ground Updating
(Castroviejo(2008))が統語・意味・運用のイン
ターフェイスにおいて機能することで、受動
文が生成され、異なった解釈が生み出される
プロセスを構築することを試み、The
Conference on Exclamation and Intersubjectivity
(2015 年 12 月、ニース・ソフィアアンティポ
リス大学に於いて)にて口頭発表した (松谷
(2015))。

高橋 (2016) では能動態と受動態では、事
態に対する捉え方の違いが反映されている
という説、すなわち受動態においては被動作

主に焦点を当て、動作主を脱焦点化するこ
とができるという先行研究の定説に加え、動
的なプロセスを静的に変え、結果状態を表す
役割を明らかにした。そして現在の視点から
過去の出来事を捉える現在完了形と受動態
との組み合わせである現在完了受動態に関
して、Nursing Research に掲載されている英語
論文を分析・考察し、談話の視点からはトピ
ックの導入や結束性という役割を果たして
いるという結論に達した。

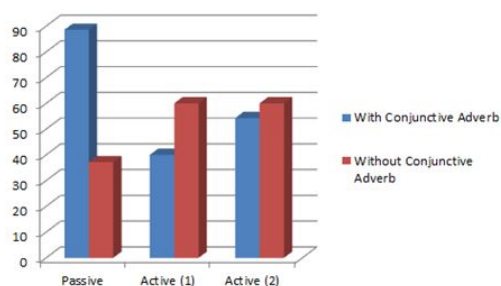
平成 28 年度は、受動文に関する生成・解
釈メカニズムと言語習得プロセスに関する
研究を推し進め、米国と日本において、英語
と日本語の大人の母語話者に対して追加調
査を実施した。収集したデータをもとに、松
谷(2017)は運用論の視点(特に、発話基盤と相
互主観性)から受動文が含意する解釈につい
て、話し手と受け手双方の視点から分析、考
察した。談話における英語受動態がコンテク
スト次第で、肯定情動的・否定情動的・事実
を述べる中立的な解釈の 3 種類があること、
相互主観性は共通知識の最新化によって誘
発されることを明らかにした。日本語受動態
においては、終助詞を伴う場合に同様な解釈
が生み出されることを示した。

平成 29 年度においては、英語と日本語の
大人の母語話者から得られたデータをもと
に、極小プログラムの枠組み下で、factivity
を備えたコンテキストと前提が英語と日本
語において、受動文の動機付になり、解釈は
統語・意味・運用・音韻のインターフェイス
において得られること、VP が派生における
フェイスとなる可能性、そして、これらの派
生と解釈のプロセスが言語習得において役
立つことを Passive – A Cross-Linguistic
Workshop (2017 年 9 月、ウィーン大学に於い
て)で口頭発表した。

2018 年 1 月に松谷・高橋・ヒロニマス・シ
ャホイアンで第二言語習得における受動文
に関してのパネルセッションを開催し、松

谷・高橋(2018)は、第二言語(外国語)としての大人の英語学習者(大学生)を対象に、生成文法の枠組みにおける受動文派生のプロセスと認知言語学の能動態と受動態に関する事態に対する捉え方の違いに基づき、受動文を選択させる(例えば受動者や対象が認知レベルで前景化されるような)コンテキスト、または能動文を選択させる(例えば動作主が認知レベルで前景化される)コンテキストと、接続副詞の有無との組み合わせの調査実験を日本語母語話者である英語学習者に対して行い、(4)のグラフが示すように、接続副詞が含まれる受動文を選択させるコンテキストにおいて高い確率で受動文が生産される事実が得られた。さらにその結果を χ^2 乗検定にかけた。受動文における p 値は 0.00029 (<有意水準 0.001)で帰無仮説が棄却され、対立仮説が受け入れられた。反対に能動文においては、p 値が 0.169 (主語が生物の場合、<有意水準 0.001)と 0.267(主語が非生物の場合、<有意水準 0.001)となり、帰無仮説を棄却できなかった。

(4)



(5) 受動文の生産に関する仮説

- a. 対立仮説：
接続副詞が受動文の生産を動機付ける。
- b. 帰無仮説：
接続副詞がある無しに関わらず、受動文が生産される。

(6) 能動文の生産に関する仮説

- a. 対立仮説：
接続副詞が能動文の生産を動機付ける。
- b. 帰無仮説：
接続副詞がある無しに関わらず、能動文が生産される。

ヒロニマス・シャホイアン(2018) ('The Power of the Passive: How the Weaker Voice Creates Stronger Writing')は、英語で書かれた論文において、読み手に行為者ではなく、行為そのものと一体感を持たせるため、つまり読み手の知覚上の傾向を最小化するために受動文が使用され、英語学習者がライティングの時に、受動文を使うことを控えるという説を再考するために、説得力に富んだ主題の Raymond Carrer の 'Popular Mechanics' とそうではない自作のフィクションの二種類に出てくる受動文の解釈・運用・生産について、英語母語話者と非母語話者の米国の大学生を対象に調査実験を実施した。そして被験者たちが動作主性の度合いに基づき、受動文が読み手に興味を抱かせるために、戦略的に使用されていることを理解しているという結果を得た。第二言語としての英語学習者自身がライティングにおいて受動文を戦略的に使用することで、能動文だけを使用する場合と比べより意味的・運用的に説得力のある文章が書けるようになったこと報告した。

高橋(2018)では、認知言語学の視点から受動態使用について、既知情報、自然な話の流れ、十分な特徴という役割があり、さらに無生物主語の受動態では十分な特徴が求められるということを前提に、Research in Nursing & Health の英語論文で使用されている現在完了受動態と副詞・副詞句との共起に関して、古賀(2009)が提唱する、客体描写副詞・文副詞・接続副詞等の分類をもとに、分析と考察を行い、副詞(句)をとともう現在

完了受動態の事例から、'previously'では不特定の過去に焦点が当たり、'to date'の場合は過去から現在までの流れに焦点を当てている事、さらに'frequently'は'in previous studies'という範囲内での頻度さを示していることを明らかにした。また、副詞(句)を伴わない現在完了受動態を使うことで、解釈において過去形から現在形への橋渡しをすること、そして既知情報との結束性を保つという結論に達した。これらから現在完了受動態は大人の英語学習者にとって重要な文法項目の一つであることを提示した。

<引用文献>

Castroviejo, E. (2008) Deconstructing Exclamations, *Catalan Journal of Linguistics* 7, 41-90.

Chomsky, N. (1986) *Knowledge of Language: Its Nature, Origin, and Use*, New York: Praeger Publishers.

Chomsky, N. (1995) *The Minimalist Program*, Massachusetts: The MIT Press.

古賀恵介(2009)「知文法における副詞の意味構造」『福岡大学人文論叢』第41巻 第3号, 1095-1123.

徳永美暁(1998)「日本語受動文の解釈:「被害」の受身は存在するのか?」,『先端的言語理論の構築とその多角的な検証(2-B)』ヒトの言語を組み立て演算する能力を語彙の意味概念から探る - 』, 447-464, 神田外国語大学

Zanuttni, R. and P. Portner (2003) Exclamative Clauses: At the Syntax-Semantics Interface, *Language* 79:1, 39-81.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計4件)

高橋 千佳子, 「英語現在完了受動態と副詞の役割 - 認知言語学の視点からの分析 - 」, 『東京純心大学紀要 看護学部 第2号』, 査読有, 2018, 1-9.

松谷 明美・高橋 千佳子, 'Passive Sentences with and without Adverbs: An Analysis of Writing Production by Japanese University Students,' *Proceedings of the 16th Hawaii International Conference on Education*, 概要のみ査読有, 2018, 853-862.

松谷 明美, 'Illocutionary Force of Passives in Present Tense Dialogues,' 『高千穂論叢 51号4巻』, 査読無, 2017, 1-13.

高橋 千佳子, 「看護系英語論文ディスコースに見られる現在完了受動態の役割」, 『東京純心大学紀要 看護学部 第1号』, 査読有, 2016, 47-54.

〔学会発表〕(計3件)

松谷 明美・高橋 千佳子, 'Passive Sentences with and without Adverbs: An Analysis of Writing Production by Japanese University Students,' *the 16th Hawaii International Conference on Education*, 2018.

松谷 明美, 'Pragmatic and Semantic Implications of Passives,' *Passive - A Cross-Linguistic Workshop*, University of Vienna, Vienna, Austria, 2017.

松谷 明美, 'Deriving Passives with Pragmatic and Semantic Implications,' *The Conference on Exclamation and Intersubjectivity*, Université Nice Sophia Antipolis, Campus Saint-Jean d'Angèle 3, 2015.

〔図書〕(計 件)

〔産業財産権〕

出願状況(計 件)

名称:
発明者:

権利者：
種類：
番号：
出願年：
国内外の別：

取得状況（計 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

松谷 明美 (MATSUYA, Akemi)

高千穂大学・人間科学部・教授

研究者番号：6 0 4 5 9 2 6 1

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

高橋 千佳子(TAKAHASHI, Chikako)

東京純心大学・看護学部・教授

研究者番号：8 0 3 5 0 5 2 8